



学術用語集 天文学編 (増訂版)

発行 日本学術振興会

発売 丸善, 331 ページ, 3300 円

用語集

お薦め度

☆☆☆☆

この本は学術用語を整理統一して学術の進歩と普及に役立てるために、文部省と天文学会共編として出版された。編集にかかわったのは学術審議会天文学用語専門委員会、日本天文学会天文学用語専門委員会、科学研究費補助金「天文学用語標準化の調査研究」班のメンバー、および30名ほどの協力者である。平たく言えば、文部省の音頭のもとに天文学会が総がかりで作ったものなので、書評するなどおこがましい、というものである。

本の内容は天文学でつかう専門用語の英語と日本語を対照させたものである。用語の意味は出ていない。和英の部と英和の部があり、語順はABC順で、日本語のローマ字読みも併記されている。

この本の意義は数多くの言葉について対訳を集めたことである。このような用語集は天文学の普及にとって必要ではある。天文学者どうしなら英語のままでも通じるが、一般むけの科学書や報道記事、教育関係で使うためには天文用語の和訳が入り乱れていては混乱のもとである。また科学の翻訳本も多数出版されているが、専門外の人が翻訳をした場合、学術用語であることを知らずに訳したらしいおかしな文章に出あうこともある。この用語集には、英語と日本語の性質の違いから、日本語の熟語にするには苦しいような言葉もたくさん入っているが、専門外の人のためには必要なのだろう。(もっとも、天文学の内容がわからないのにムリに翻訳をするのは止めてもらいたい、というのが私の本心だけけど。)

さて問題なのはこの本の使われ方である。私はこの本をじっくり見るまで、「黒体輻射」はお上によって使ってはいけない言葉になっているのを知

らなかった。(当分のあいだは使用してよいが望ましい言葉ではないとされた) その経過は巻末に書かれているが、「かなりの数の大学教官の強い希望にもかかわらず」である。そうか、だから私の好きな「降下円盤」(降着円盤とすべし)も「つじつまのあう場」(自己無どう着場)も「われわれの銀河」(天の川銀河か銀河系)もこの本には出ていないのか。きっと天文学者の数だけ不満はあるに違いない。

学術用語は時とともに変わる。前の版にあった「星雲」という言葉はこの版でようやく消滅した。つまりこの本は、出版された時点での学術用語の集成であり、じきに時代遅れになる宿命をもつ。こういう限界があることを使う側は心すべきである。この本に出ていないからといって、教科書で使ってはいけませんと規制されませんように。

私は文科系の大学に勤めているが、辞書に関する仕事をする人は言葉に関して多少なりともマニアックであるべきだという印象をもっている。マイルドな人格者の集まりである天文学会にこの種の完璧な仕事を要求するのは無理なようだ。(巻末のリストにある私の名前が違っているのは象徴的である)むしろ地味で大変な仕事を曲がりなりに完成させた労力に素直に感謝すべきだろう。

最後になるが、この本のローマ字表記はヘボン式ではない。いまや天文学者の半分以上と教育関係者の大部分は、この本で使用しているローマ字表記になじみがない。その点でもこの本はすでに時代おくれである。文部省の行政矛盾に学会が追隨して得になることはあまりない。

加藤万里子 (慶応大学)